米欧亜回覧

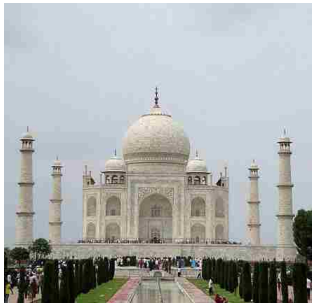
第６５号
発行
特定非営利活動法人
米欧亜回覧の会
編集委員会

新年懇親例会は「インド」をテーマに
一月十九日、銀座のラージマハールで

当会の新年懇親例会は、ここ十数年、岩倉使節団が訪れた国々をテーマに順繰りに行われてきたが、それも一巡したので、本年一月は帰途に立ち寄った中国をテーマに行われた。さて、新年はというので、「唐」の次は「天竺」、今や躍進するインドをフュウチャアすることになった。二〇一二年は時あたかも日印交流六十周年にも当たるというので、インド大使館からも首席公使のパンダ氏が臨席して大いに交流懇親を深めようとの申し出があった。

思い起こせば、インドとのおつきあいは明治期に始まって、名だたる人物の交流があった。タタ財閥の創業世代と渋澤栄一、岡倉天心とタゴール、ビハール・ボースと中村屋の相馬家、戦後は東京裁判でのパル判事など…、そして今日の観光、スズキ自動車、ＩＴへとつながっている。場所は「王侯貴族の味」を謳う銀座通りに面したインド・レストラン、そのマハール的（宮殿風）の雰囲気の中で日印交流と懇親の時を過ごしたい…

ご家族、友人、お誘いあわせのうえ多数の出席を期待している。



タージ・マハール
（2011年8月）

会員によるパネル・ディスカッション「岩倉使節団は、明治国家に何をもたらしたのか」熱気こもり盛会！

第六十一回全体例会は、十一月五日（土）、五十余名が参加し国際文化会館講堂で開催された。日本の政治状況があきれるほど低迷するなか、明治維新期の政治家たちの姿を検証することには大きな意味がある。泉三郎氏のコーディネートのもと、会員六名のパネラーが次々と発表し、岩倉、木戸、大久保、西郷、伊藤、大隈の実像に迫った。会場からの質問、意見も活発で、熱気のこもったパネル・ディスカッションになった。

（詳細は二・三頁）

第61回全体例会（国際文化会館）

新会員を迎えての歓迎懇親会、大いに盛り上がる

ここ二年ばかりの間に入会された方を歓迎し、幹事多数も出席して懇親を深める会が十一月五日夜、「麻布楓林」で開催された。ウェブで知ったとして入会した新入会員も複数あって、それぞれの自己紹介もあり、賑やかな楽しい宴となった。とりわけ異色だったのは青い目の青年紳士で、岩倉使節団に理事官として加わった東久世通禧の五代目だとわかった。こうして新しいメンバーが増えていくことはまことに心強くうれしい。

尚、入会一年の政井寛氏から感想文が寄せられたのでご覧いただきたい。（四頁）

あなたの幸福度は？
平成の日本人の幸福度は？

泉 三郎

「幸福度」という言葉が最近目立つようになった。ＧＮＰやＧＤＰでは測れない別の物差しが必要だという認識が高まっているからだ。世界各国のいろいろの機関でその数値化が試みられ、日本の内閣府でもこのたび百三十にも及ぶ項目をあげて指数化に乗り出した。一般市民も過日来、幸福を国家目標に掲げた小国ブータンから若き新婚の王と妃が日本を訪ねてさわやかな風を起こして関心が高まっている。

しかし、その幸福度、いざ測るとなるとなかなか難しい。よく使われる数値の中身をみてみると、平均寿命、識字率、就学率、就業率、それに離婚率や自殺率や政治的自由度などが加味されたりするが、幸福感という感触からすれば今一つしっくりこない。それではと、直接個人に「あなたは幸せと感じていますか？」と問いかけて集計しても、これまた漠然とし過ぎているきらいがある。

そんなことを思っていると、トム・ラスとジム・ハーター共著の「幸福の習慣」なる本を見つけた。原題は「WELL BEING」だから、「よく生きること」、「良き人生」とも解釈できる。これは世界的に有名な世論調査会社ギャラップが行った膨大な調査に基づき書かれたもので、なかなか面白い。そこに「人生を価値あるものにする」要素として次の五つが挙げられている。

一．仕事に情熱をもって取り組んでいる。二．よい人間関係を築いている。三．経済的に安定している。四．心身共に健康で生き生きしている。五．地域社会に貢献している。

五つにしたことが解りやすい。ギャラップによるとこの要素は世界共通であり、国や地域によって異なることはないという。

そこで思うのだが、この五項目で、われわれも自身の幸福度を測ってみたら如何なものだろうか？そして、物や情報に溢れた平成の日本人はいったいどれくらい幸福なのか、に思いを馳せ、ブータンを連想させる「逝きし世の面影」（渡辺京二著）にみる江戸期の日本人と比べてみたらどんなものだろうか。

第61回 全体例会

歴史部会担当

会員によるパネル・ディスカッション「岩倉使節団は明治国家に何をもたらしたのか」

第六十一回全体例会は十一月五日（土）、国際文化会館講堂において開催された。出席者は約五十名。

第一部では、まず泉理事長から現況報告をかねた挨拶があり、つづいて石垣事務局長から会務報告（例年より順調な会費納入状況、十五周年記念小論集のためのホームページ容量の増加等々）が、各部会幹事からは活動状況について簡潔な報告が行われた。

小休憩の後、第二部の会員によるパネル・ディスカッション「岩倉使節団は明治国家に何をもたらしたのか」が行われた。最近の低迷する日本の政治・経済情勢の中、日本の政治家に対するリーダーシップが問われている今日だが、もう一度明治の原点に戻り、岩倉使節団に参加した岩倉、大久保、木戸、伊藤に、使節団回覧中の留守政府を代表する西郷、大隈を加え明治のトップリーダーが国作りにどのような役割を果たしたかを皆で考えようと云う企画である。

泉理事長をコーディネーターに会員がそれぞれの政治家の研究成果を発表し、全員参加型のパネル・ディスカッションとなった。詳細報告は後述されるが、参加者からは「パネラーの熱意あふれる深い分析と発表に感銘した」「様々なテーマでこのようなパネルを続けるべき」等の高い評価をいただいた。周到な準備をいただいたパネラーとコーディネーターに敬意を表し改めてお礼を申し上げたい。

例会の後、有志による「新入会員歓迎懇親会」が麻布風林で開催され、二十二名の新旧（？）会員の参加があった。ちょうどパネルの直後でもあり、少し話し足りない雰囲気も手伝い大変盛況な歓迎懇親会となった。その場で入会の申し込みをされた新会員もあり、最後まで和やかで且つ活発な懇親の場となった。皆様のご支援とご協力に深謝。また新入会員の皆様の会の諸活動への一層のご参画を心からお願いしたい。（石垣禎信）

左から、山田哲司氏（岩倉）、大平忠氏（大久保）、芳野健二氏（木戸）

◆第二部◆

今年は、岩倉使節団が米欧回覧に出発して、丁度百四十周年になる。歴史部会ではこの一年間、幕末明治維新の英傑を中心とした人物論シリーズで勉強会を続けてきた。その中間総括の意味も兼ねて、偶々、今年の三・一一の震災を契機として、日本人論や日本国家像に対する見直し気分が彷彿としている時期でもあり、明治国家の「国のかたちを考えた」岩倉使節団が、その後の明治国家にもたらしたものは何だったのか。それが、今日の日本の国家像を考えるに際し、どんな意味を持っているのかを考えてみたいとの主旨で、パネル・ディスカッションが計画された。パネラーは、歴史部会で、それぞれの人物論を担当した講師が担当、司会は泉三郎代表が担当し、会場の出席者も、全員参加できることを目指して企画された。

パネラーの担当は次の通り。

岩倉具視（山田哲司氏）、大久保利通（大平忠氏）、木戸孝允（芳野健二氏）、西郷隆盛（小野寺満憲氏）、伊藤博文（永富邦雄氏）、大隈重信（小野博正氏）である。

【討論概要】

司会の泉代表から、まず今回のパネル・ディスカッションの趣旨説明がなされ、岩倉使節団がもたらした成果について、使節団組から、岩倉具視、大久保利通、木戸孝允、伊藤博文の四名、留守組から西郷隆盛と大隈重信をとりあげ、考えて見ることになった。

岩倉具視は孝明天皇の侍従に取り立てられ、早くより異国の脅威を前にしての朝廷改革の必要性を説いている。八十八卿列参事件直後には、孝明天皇に『神州万歳賢策』（諸外国回覧や国防案など）を建策、生涯に五十五本の国事意見書を書いた建策魔でもあった。日記や手紙も比類なく多く残す。佐幕派とみなされて、五年間岩倉村に蟄居、隠棲の時期も坂本龍馬、大久保利通、島津久光らと接触、国のかたちを考え続け、謹慎解けるや、大久保らと共に小御所会議を経て、一気呵成に王政復古、明治維新を実現している。天皇を頂いた政体を念頭に、回覧後も、ぶれない態度を貫いた。回覧中の「メモ書き」に、一夫一婦、鉄漿、太陽暦、鉄道、宗教に触れており、死ぬ直前まで、伊藤博文が渡欧研究中の憲法のゆくえを気にかけていた。華族・皇室改革への関心も終生かわらなかった。

大久保利通が回覧で持ち帰ったものは、弱肉強食の世界を生き抜くためには「富国強兵」「殖産興業」で、国づくりにはドイツ式官僚制度、そして、究極の政治は君民共治の開明的立憲政治であるという確信である。そう決めた大久保は、その後、まったくぶれなかった。明治六年の征韓論起因の政変も、親友の西郷を切ってまでも断行した。非情の人、リアリストと呼ばれる所以である。人の意見はよく聞き、熟慮し、瞬時に決断

左から、小野寺満憲氏（西郷）、永富邦雄氏（伊藤）、小野博正氏（大隈）

すると揺るがず、総力で実行した。不動の軸を持った政治家であった。それを漸進主義で行くことを欧米回覧で学んだ。一番回覧で変わったのは大久保かもしれない。大久保は明治を体現する精神であった。国家の精神は、非情であり、時に非合理を孕む。それが大久保不人気の原因でもあったろう。

木戸孝允は、真面目で清廉な民権尊重の漸進主義者である。現在の企業人の如く、PLAN, DO, OFF（悩み、離れ、正、反、そしてまた悩む、そして時には拗ねる。その悩み、拗ねる力が木戸の魅力である。征韓論も元は木戸が言いだしたが、帰国後悩んだうえ、征韓不要、内治優先に転じた。憲法も回覧中に、畠山（米）、河北、安川（英）、青木（独）に研究させている。正鵠を得たグランド・デザインが描けた人であるが病弱であった。

西郷隆盛は留守部隊の一番の実力者である。おれに任せて行って来いと、使節団を送り出している。それが、彼の使節団への貢献とも言える。留守部隊は、実は、信じられないほど改革をやっている。西郷が、皆を信頼して印鑑を預けるほどの豪胆であったから、大隈が言う、“鬼の居ぬ間の洗濯”が自由にできたのである。西郷は、富士山のような存在で、そこに居るだけで意義があった。西郷は、至難の宮中改革にも尽力した。

司会の泉三郎氏

伊藤博文は百姓の出である。父親が軽輩の武士の養子になったことから士分になるのであった。伊藤は生涯明るい性格で、封建制度に見切りをつけ、外国人と接触、密航まで企てた。伊藤は、回覧後に、岩倉・大久保・木戸など元勲の調停役と根回し役で力を得ていく。国境画定の時代のロシアの北東アジアの脅威などに気付く。朝鮮半島にロシアを近づけないための韓国併合や最後は高島嘉右衛門の悪い占いを知りながらも、ロシア外相との会見に向かって、凶弾に倒れた。回覧の成果としての憲法制定に精魂を尽くし、それに魂を入れるために、初代首相に就任、維新改革の元老の中で、一番明治国家の確立に尽くした。明治天皇の信頼も最後まで厚かった。

大隈重信は今回登場の元老の中で、一番長生きしている。回覧中の、留守組は西郷、板垣、後藤の他は、佐賀藩出身の大隈・副島種臣、大木喬任、江藤新平で占められている。これは岩倉が鍋島閑叟を如何に信頼していたか、佐賀藩が如何に実務能力を持っていたかの証である。留守組は、一．大木文部卿の学制改革、二．山県の徴兵制、三．地租改正の推進、四．太陽暦の採用、五．鉄道・電信の建設、六．貨幣制度改革（円の導入）、七．予算会計制度確立、八．府県裁判所設置など、矢継ぎ早の改革を思いのままに推進している。明治六年の政変で、征韓論に連座して、江藤、副島が去り、明治十四年の政変では、参議筆頭の大隈が天皇と東北行幸の留守に、大隈罷免を決めている。大隈の積極財政とイギリス流立憲君主制に反対というのが理由だが、実際は北海道開拓使官有物払下げ問題が争点であった。これで、薩長閥の天下となってしまった。

この後、会場出席者との**質疑応答**に移る。主なものは、

A．明治憲法は井上毅が書いたのでは？

井上は岩倉の信頼も厚く、その指示で、先に憲法草案も書いた。伊藤とも信頼関係にあり、伊藤の渡欧成果を中心に共同で取り組んだ。

B．実記では、使節団は共和制に傾倒していたと思うが、なぜ天皇中心になったのか？

幕末の密勅や勅命で維新が実現したこともあり、キリスト教のない日本で、国民の求心力を持つためには、やはり天皇中心が纏まりやすいと回覧中に確信したこと。

C．明治の英傑は何れもよく短期間で勉強しているが、使命感からか？

幕末・維新の英傑は、皆必死で勉強している。やはり、維新革命を成功させないと日本の独立が達成できないという使命感だろう。木戸は回覧中も、夜が白むまで悩み、勉強しており、その姿に象徴される。

D．明治憲法は、統帥権など昭和の戦争にもつながる欠陥商品では？

統帥権は、司馬遼太郎のいう「鬼胎」だが、天皇の軍隊を機能させる有力な制度であった。運用の危険性・欠陥には、伊藤も山県も気がついていたが、自分たち元勲のいる間は大丈夫との思いもあり、伊藤は改憲も視野に入れていた。

さて**岩倉使節団の成果を総括**するとどうなるか。

時代は、欧米各国が国民国家を模索する最中であった。アメリカの南北戦争（一八六一～六五）、普仏戦争（一八七〇～七一）、パリ・コンミューン（一八七一）、普墺戦争（一八六六）、イタリア統一（一八六一）、ビスマルクの鉄血演説（一八六二）など、その歴史的背景の中での「回覧」の成果は次の三つに要約されるだろう。

①日本的国民国家実現には、急進的民権化を避け、漸進的に秩序だった、天皇を中心にすえて求心力を持つ、和魂洋才の道だと、回覧組が一致した見解を得たこと。

木戸は急進改革派から慎重派に、大久保は保守派から、殖産興業、富国強兵の改革派に、伊藤はアラビア馬的、急進から堅実・調整役へ、そして岩倉は彼らの紐帯役となった。

②イギリスで産業革命の成果を見て驚くが、それも僅かに四十年の遅れに過ぎないとの外遊組共通の認識を得たことが、その後の政治の流れを作った。大日本帝国憲法は、そのひとつの到達点であり、日清・日露戦争がもうひとつの結果だったかもしれない。

③歴史には、現在から見て禍根や批判はつきものだが、その時期の世界的背景に思い至らないと見えてこないものがある。明治国家もそのひとつだが、開国の荒波をくぐって、現在の日本があるのは、やはり明治国家の選んだ礎の上にあるのだろう。

（文責）小野 博正
（写真）橋本 吉信

今年入会させていただきました

二〇一一年度新入会員　政井 寛

現在があるのは過去からの積み重ねの結果である。私が歴史を好きな理由はこの歳になっても腰の定まらぬ人生を送って、いまだ「自分探し」をしているせいかもしれない。特に幕末から明治維新へと急転直下した世の価値観、大正ロマンから昭和恐慌を経て第二次世界大戦に突入した世相の移ろいには興味をそそられる。

そんな私に「米欧亜回覧の会」入会の勧誘があった。断る理由等どこにもない。ビジネスで培った落ち着きのある風貌のせいか入会試験や面接も省略していただき国際文化会館に通い始めて一年が経過したのであった。

その間、幾つかの講演を拝聴しそれぞれに思いもよらぬ刺激を受け続けてきたが、圧巻は十一月五日に行われた「岩倉使節団は明治政府に何をもたらしたか」であった。会員有志の研究発表を兼ね、パネラーそれぞれが当時の主要人物になり変わってのパネルディスカッションは必要以上にその人物に感情移入をするほど熱が入り、聞く人を楽しませてくれた。驚いたことにそのパネラー達は皆ビジネスマン出身で本会の会員として研究を重ねた人らしい。知識力は大学教授並、表現力は劇団の俳優に勝るとも劣らない出来栄えだった。もしかすると私自身も今後の修練次第でこの域に達する事ができるのかと身の程知らずの思いが頭をよぎったものだった。

いま「入会しての感想」を求められ振り返ってみると、確かにこの会を通じて幾つかの事柄に少しだけ深くなった気がしている。しかしそれ以上に素晴らしい体験をしている事にあらためて気がついた。それは会を通じて知り合った方々との交わりや議論で感じる、人の「文徳」である。その輪の中に入ることで自分自身にも文徳の匂いが漂うような錯覚におちいる。

半可通な話はこの当たりで止めるが、今、世はグローバリゼーションと騒いでいる。そして日本企業はどんどん海外へ進出し、世界やアジアと融合する気配を感じるが、一方では日本や日本民族のアイデンティティをどこに求めるか問われているような気がする。明治政府がいわば文明開化というグローバル化を艱難辛苦のすえ乗り切ったように、今度は我々がいま文化のグローバル化に直面して岩倉使節団のような高邁な使命感と心意気が試されているのではないだろうか。日本の素晴らしい文化を残し、後世の人から平成文化維新と呼ばれるよう微力ながら貢献できればと考えてる。その為には「岩倉使節団」から学ぶべきことが多々ある。今後とも宜しくご指導ください。

岩倉使節団から百四十年、初めてボストンを訪ねて

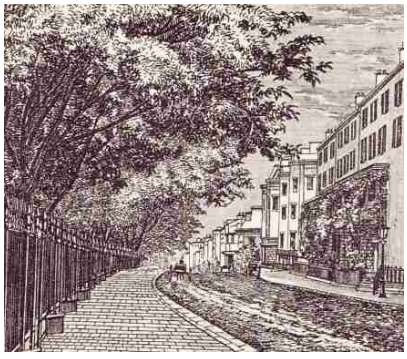
小松 優香

このたび大学から半期間（約半年）、公共哲学や政治思想を学ぶ機会を得て、ボストンに来ている。私にとって、初めてのアメリカ生活で、見るもの触れるもの全てが目新しく、生活での戸惑いはもちろん、あらゆるものが刺激的に感じる日々である。とくに私の住まうプロビデンスは黒船のペリーの出身地でもあり、ボストンは岩倉使節団が二度にわたって訪れた街であり、毎週通うMITとハーバードは使節団に随行した留学生、団琢磨と金子堅太郎の通った大学である。私はまさに近代日本の原点のような、当会ゆかりの地にいるわけで、『実記』を読み返しながら臨場感を覚え、自分も使節団の一員になったつもりで過ごしている。

最初に訪れたボストンは秋で、まだほんのり暖かく紅葉が綺麗だった。まず私は電車の乗り方やバスの乗り方、街の道順を覚えるため、地図を片手にあちこち歩きまわった。ボストンの街は、無駄な看板など一切なく英国風の赤レンガで統一され景観が美しい上、歴史と知性を感じる場所である。その素晴らしさに、一目で魅了されてしまった。とくに、ビーコンヒル界隈の上品な佇まいは、古くからの文化の厚みと歴史の重みを思わせ、犬を連れながら散歩する女性や公園のベンチでのんびり過ごす老夫婦など、街ゆく人々にゆとりを感じる。まるで映画のワンシーンのような街で、そこに居るだけで心が弾む。

また、チャールズ・リバー沿いに並ぶ有名大学、なかでもMITとハーバードは対照的でありながら知の最高峰として烽火をあげている感じである。とくにMITの建物は大学とは思えないほど現代建築を駆使したアートの塔で、そこでの科学とスピードの最先端技術は目を見張るばかりだ。大学内はすべてコンピューターで操作され、ドアtoドアが十五秒ないし四十五秒で締め出されてしまうというセキュリティーぶりで、私はビクビクしながら移動している。街全体が大学中心に整備されていて、ケンダル駅を降りるとすぐMITのキャンパス内に通じ、その中心に有名教授陣の研究室があり、その周りにメディカル・ジェネティクス、ヒューマンサイエンス、言語学、哲学のラボおよびインスティチュートがあるといった具合で、それぞれが少数の教授陣と少ない優秀な学生で構成され、自由に研究できるようになっている体制が何とも魅力的である。私は、その中のヒューマンサイエンスと哲学の図書館を利用し調べものをしていますが、日本の大学と比べ研究費や研究スピードの差に圧倒される。

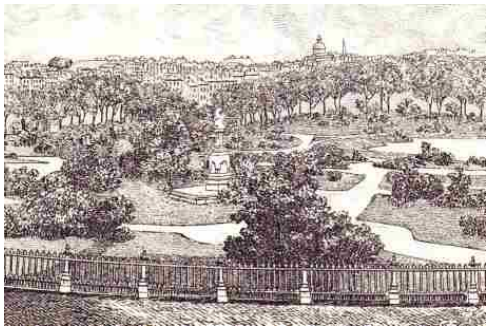
一方のハーバード大学は、駅としては二つ先の隣街だが、こちらは伝統と文化の香り高いクラシカルな建物で、政治経済の高度な知性と洗練された感性の集まっているところである。私は長らく追い求め



波士敦ノビーコン街（『実記』）

ている石橋湛山の思想を「近代の超克」という大テーマの中で捉えるため、国際文化会館とも縁のあるライシャワー日本研究所を訪れた。そこにはヒラリーという同年配の少し日本語の話せる知性溢れた素敵なセクレタリーがいて、彼女が色々気遣ってくれる。日本研究所なのに日本人がいないのはどうして？最近来ている日本人はどう？などと話していると、現在日本人はごく僅かであり、ＭＢＡで人気のビジネス・スクールでさえ圧倒的に多いのは中国人、続いて韓国人、日本人は二、三名だという。また、ボストン近郊に住んでいる日本人も少なく、日本文化の象徴である茶の湯や華道をアメリカ人から習っているという。なんだか元気のない日本に寂しい思いがしたが、確かにそうかもしれない。

（続く）



波士敦ノ公園ヨリ州庁ヲ望ム（『実記』）

実記を読む会報告

担当幹事　桑名 正行
Tel&Fax 03-3642-9570
mkuwana@nifty.com

■第百五十四回

十月十三日開催、出席者八名。第十九巻　新約克府ノ記、第二十巻　波士敦府ノ記。

今回の報告では各都市の歴史を辿り、ニューヨークは一八一一年、マンハッタンの碁盤目状の都市計画、ボストンは一七七五年、ボストン郊外レキシントンで勃発した独立戦争の戦史を振り返った。両巻とも両都市の産業経済面の特色を詳細に説明しているが、第十九巻で久米は「バイブル」会社に案内された後、キリスト教について所感を述べる一方、両都市で具体的な学校名こそ挙げていないものの大学も見学。そこでアメリカを特色づける宗教と大学に焦点を当て、アメリカのキリスト教の来歴とボストン、ニューヨークの高等教育の状況を中心に紹介し、現代アメリカの動向を考えるよすがとした。

久米はキリスト教に関しバイブルの「説怪ナルモ信スルニ誠ナリ、（中略）宗教ニ尊フベキハ、実行ニアリ」として儒教、仏教等東洋の宗教と比較してプロテスタントによる倫理的実行性を高く評価。アメリカのキリスト教は、当初プロテスタントを中心に英国のピューリタン（清教徒）がオランダ経由で米大陸に上陸した後、コングリゲーショナル・チャーチ（会衆派教会）を形成する一方、大陸のツヴィングリ、カルヴァンの流れを汲むプレズビテリアン・チャーチ（長老派教会）もプロテスタント教会の有力な一部を形成し、さらにバプティスト派に分岐。その後南部に英国教会が浸透し、米国聖公会に発展したほか、ローマ・カトリック、ギリシャ正教等々、移民社会のアメリカでは各出身国の国柄を反映したキリスト教が招来。なお久米のキリスト教観を含め『岩倉使節団における宗教問題』（山崎渾子、思文閣出版）による日本のキリスト教解禁に至る研究がある。

アメリカの教育制度は第二巻で大学を含め紹介しているが、ニューヨーク、ボストンの両都市にはハーバード、コロンビア等アイビー・リーグの主要大学が置かれアメリカの高等教育の歴史において先駆的役割を果し、アメリカ独特の大学世界が形成され、州の高等教育体制を含め具体的に見てみた。英訳実記等からニューヨークの「当府ノ大学校」とは現在のニューヨーク大学（創立一八三一年、私立）、ボストンでの「市中ヲ巡回シテ、学校ニ至ル、」とある学校とはマサチューセッツ工科大学（ＭＩＴ、創立一八六一年、私立）と推定。ＭＩＴは創設間もない時期であり、その後キャンパスはビーコン街から現在地に移転。今年女性学長のもと創立百五十周年を迎えている。なおハーバードの訪問記録はないが、文部省『理事行程』で授業科目を紹介。当時の大学要覧と明治八年の東京開成学校（東京大学の前身）の教育課程を対比し設置科目の類似性を管見した。

（文責）大森　東亜

■第百五十五回

十一月十日開催、出席者十名。第十巻「コロンビア」県ノ総説・第十一巻　華盛頓府ノ記　上

第十巻でコロンビア特別区の由来にふれる。ワシントン市での滞在が長期（百三十余日！）にわたったためか、市街の道路管理など、観察は細部にわたる。

第十一巻は、明治五年一月二十一日、ワシントン入りから、二月二十四日までをカバーする。この三十三日間のうち、十八日は、『実記』には天候のみで「記事が無い」。

いよいよ条約改正交渉の本番入りで、使節首脳以外の団員は、久米を含め、「見学」に精を出したと思われる。条約改正に関する日米会談は十一回を数える。

岩倉使節団といえば、直ちに「対米条約改正交渉の失敗」というマイナスのイメージがつきまとうことに、かねがね違和感をおぼえていた。

「サンフランシスコを皮切りに、各地で受けた使節団への熱烈な歓迎ブームを見て、条約改正の好機と進言した森有礼の口車に乗ったのが間違いだった」との木戸副使のお見立ては、当らぬのではないか。あの岩倉・大久保が、森有礼にミスリードされる筈がない。アメリカ側は、条約改正の予備交渉に来訪する岩倉使節団を迎えて、「いっそのこと、本格交渉から、調印にまで持って行こう」との執念で、準備万端用意していた筈で、森有礼公使もそれを充分承知のうえ、日本の国益を損わぬためにも、「全権委任状」の取付けを進言したに相違ない。岩倉・大久保は、本格交渉の結果が「成／否」いずれに出るか、そのリスクをとっての決断をした筈だ。

結果は、「最恵国条項」といういわば「ジョーカー」の出現もあって、米・日・欧州諸国いずれも深手を負うことなく納まった。

（文責）桑名　正行

英訳実記を読む会報告

担当幹事　岩崎洋三
Tel &Fax　03-3488-0532
iwasaki-yz@jcom.home.ne.jp

■第九十五回

九月十五日開催　Ch.74　A Record of the City of Florence,　Vol.4 pp.268-282

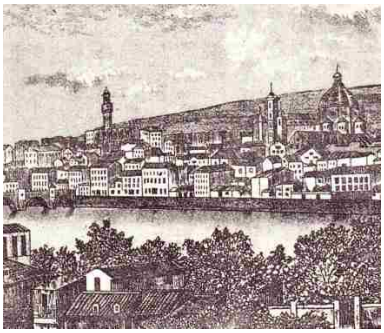
前々日の深夜ミュンヘンを汽車で出発した一行が、ブレンネル峠を越えて早朝フィレンツェに着いた一行が、翌日深夜ローマに出発するまでの二日間忙しく市内・郊外を観光するのが、今日に部分。

一行は到着した日の午前中にはサンタマリア寺院、ウフッツィ美術館等を精力的に観光するが、巨大なドームや八十二mもの鐘楼に圧倒されたせいか久米はローマの歴史を三千年と勘違いする。

二日目の午後は「豪族某氏」（ジノーリ侯爵）の陶器製造所を見学したり、イタリアの養蚕業について詳細な説明を受ける。久米は触れてないが、この時代イタリアは蚕病（微粒子病）で大被害を受けた養蚕業再興のため、世界で最も健康な日本の蚕種を輸入するのが喫緊の課題であった。対日外交もそれを早期実現することが中心課題で、使節団のイタリア訪問に随行したフェ・ドスティアーニ駐日公使や陶器製造所見学に同席したネーグリ（ハンブルグ総領事）は養蚕業者の付託を受けて奔走していたようだ。

英訳については、「最後の文章は動詞がない」、「fly constructions」と言うものの実態が不明確等の指摘があった。

（文責）岩崎　洋三



「アルノ」河ノ景（『実記』）

■第九十六回

十一月十七日開催、Ch.75 A Record of the City of Rome, 1　p.p.283 -304

この七十五章の前半は広大な版図を持ったローマ帝国を記述し、後半はローマの観光案内となっている。

コロンブス、ヴァコダガマ以降東西が接触を開始したと言う者もいるが、後漢書ではローマ帝国と中国の最初の交流はA.D.166ローマ皇帝マルクス・アウレリウス・アントニヌスが使者を中国（後漢）に送ったとの記述がある。

久米が携帯していたAppleton's European Guide Book（1872）に誤りが多く、それを久米がそのまま名所・旧跡の説明に用いていると、英文実記の筆者は述べている。その誤りを、英文実記の筆者は一々訂正している。しかし、この訂正にもJTBのトラベルガイドを参照すると、数箇所間違いがある。私見だが、米欧回覧実記を、トラベルガイドとして使用するときは注意すべきだ。

（文責）小坂田　國雄

歴史部会報

担当幹事　小野 博正
mi040031-9697@tba.t-com.ne.jp

■伊藤博文ー明治国家を創った男（講師:泉三郎氏）

九月二十日開催。

伊藤博文の一般的なイメージ。

一．西郷や木戸や大久保に比べて二流、創業者の名には価しない。要領よく時流にのった運のよい継承者。

二．藩閥政治家、権力主義者、反民主主義者。明治十四年の政変で大隈・福澤らの共和主義者を追放し、天皇専制国家路線を定着させた保守反動家。

三．ドイツ憲法に倣って専制的な帝国憲法をつくった張本人。統帥権を制定し軍事大国への道を拓いた。

四．朝鮮への侵略主義者、保護国化をすすめ自らその初代統監となった。

五．哲学（思想）がない、理念がない、現実主義者。

六．軽薄才子、好色漢、ひひ爺、道徳性に欠ける。

しかし、伊藤博文の事績を丹念に追っていくと、実像は大いに違って、「明治国家のかたちを具体的に創り上げた大政治家」であることがわかる。その伊藤の実像をいくつか列挙すれば次のようになるだろう。

一．全身これ政治家、剛の大久保に対して柔の伊藤。和魂を保守するため「日本独自の「憲法」を創り、単に法文としてだけでなく制度として運用を考慮にいれ、しかも自身運用した。

二．藩閥意識は早くに脱しており、広く人材を登用した。体質的に民主的であり、それを天皇とどう折り合い付けるかに苦心した。

三．英米の制度もよく勉強して長所を取り入れるようにした。

四．英語をよくし、世界的視野をもち、国際的に知己が多く、あくまで平和志向だった

五．「理念ある政治家」、「知の政治家」、「ステーツマン」だった。

六．愛嬌があり、信義に厚く、金銭に淡泊。あかるくおおらかで、愛妻家でありながら芸妓と　酒を好み、辺幅を飾らず、庶民的であり、人間的な魅力があった。

（文責）泉　三郎

志士時代の伊藤博文
（泉三郎著「伊藤博文の青年時代」より）

■フルベッキ～明治の国造りにも貢献したプロテスタント宣教師～（講師:岩崎洋三氏）

十月十七日開催。

一八五八年六月、日米修好通商条約が調印され、その一年後に神奈川・箱館・長崎が開港されると同時に米国プロテスタント各派の宣教師が続々と日本に派遣される。オランダ改革派からは三人が派遣されたが、その中にフルベッキ（Guido Fridorin Verbeck 1830-1898）がいた。

フルベッキが生まれたオランダのザイストは、ルターより百年以上も前に宗教改革を提唱したプラハ大学総長フスの流れを汲むモラビアン派のセ

ンターで、フルベッキも家庭内、初等学校そして教会でその影響を強く受けていた。ユトレヒトの工科学校を出て二十二歳のときにアメリカに移住し、工場や工事現場の技師として働く。病気をきっかけに宣教師になる決意をして、ニューヨークの神学校に入学する。三年間学び二十九才で卒業と同時にオランダ改革派の宣教師に採用される。その時フルベッキは無国籍だったが、オランダ人で英仏独語にも長けたところが買われた様だ。

フルベッキが長崎に着任した一八五九年十一月当時は、まだキリスト教禁制高札が撤去されておらず本来の目的である布教はままならなかった。一方、英語学習が喫緊の課題だった長崎奉行は翌年洋学校済美館を設立してフルベッキを教師に雇う。長崎御番の佐賀藩も、済美館に学んだ大隈重信や副島種臣が中心となって一八六六年に洋学校致遠館を設するとフルベッキを校長に招聘する。そこでフルベッキは英語のみならずアメリカ独立宣言や憲法等幅広く教授するが、全国から集まった英才を通じてその評判が広まり、フルベッキの下には幕府や諸藩等から欧米事情の照会、子弟の留学斡旋（岩倉具視、勝海舟、横井小楠も）、お雇い外国人の招聘斡旋など多様な要望が集中した。

来日十年後の一八六九年には新政府太政官三条実美から、開成学校教師・政府顧問として東京に招聘される。（この時の使者山口尚芳はその後岩倉使節団副使になる）その後大学南校の教頭にも就任し、文部行政の顧問としても活躍する。岩倉使節団に関しても、出発の直前一八七一年十月に岩倉具視がフルベッキを訪れ、その二年前に大隈重信に提出していた政府海外視察団の企画書Brief Sketchの再生と説明を求め、岩倉使節団はほぼそれに沿った形で実施された。

公職引退後も明治学院の設立、旧約聖書の日本語訳や本来の布教活動に活躍するが、一八七七年には勲三等に叙せられ、一八九一年外務大臣榎本武揚から無国籍のフルベッキに対し滞在許可の特許状が発給される。一八九八年に東京で逝去すると、政府派遣の近衛兵が棺を担ぎ、東京都が提供した青山墓地に葬られるが、その遺徳を偲び高橋是清、副島種臣、前島密等教え子三十九人が発起人となって紀念金が募られ碑が建てられた。

一介の若年無国籍宣教師が、キリスト教禁制下の日本でここまで活躍できたのは驚きだ。その背景やネットワークを探る興味は尽きない。

（文責）岩崎　洋三

■『岩倉具視』―国の形を探り続けた男（講師:山田哲司氏）

人物論シリーズで愈々、わが会のご本尊『岩倉具視』の登場である。十一月二十一日、出席者十六名。アヘン戦争、ペリー来航の時代背景下、一八二五年に，京都の下級公家の子として堀川家の子として生まれる。十四歳の時、岩倉具慶の養子となり、具視を名乗り、元服、昇殿を許される。ペリー来航の十八歳、関白鷹司政通の歌道に入門。早くも人材育成、実力主義を骨子の朝廷改革を提案。生涯、その筋を貫く。

日米和親条約の一八五四年に、孝明天皇の側室であった堀川紀子の引きか、侍従となり、三年後には近習に昇進している。その年、八十八卿列参事件で頭角を現わし、二日後には孝明天皇に『神州万歳賢策』を提出している。その中では、国を一つにして、国防を固め、後の岩倉使節団派遣につながる、海外回覧するまで和親条約は結ぶなと述べている。

和姫御降嫁を上申、その頃、『航海策』の長州藩長井雅樂や大久保利通、島津久光らと会っている。その直後、佐幕派とみなされて「四奸二嬪」と共に失脚、岩倉村に蟄居。蟄居中も『叢裡鳴虫』『全国合同策密奏書』『航海策』などを書き、孝明天皇崩御後に五年ぶりに帰参を許されると、矢継ぎ早に国事意見書を連発、生涯で五十五の意見書を書いた建策男でもあった。ご存知の通り、小御所会議後は王政復古、明治維新へと一気呵成である。

欧米回覧の後は、華族会、国立十五銀行（華族銀行）、日本鉄道会社や京都保存に関する建議などにも尽力した。明治維新は岩倉なくして成立しなかったとも言え、維新後の国の形を探求した生涯だった。五十九歳、食道癌で死去。死の間際まで、伊藤博文が渡欧研究中の憲法の行方を気にかけていた。眼彩人を射て弁舌流れるが如し。異常の器（鷹司政通評）、鉄の意志の人（ベルツ評）、奸物といわれたが、忍の人、主義の人であり、智恵と才気、弁舌と文才（建議・日記・手紙を多く残す）にあふれ、剛毅果断にして調和あり、策を立てて実行に移し、筋目を守り、親切で真摯であった。（池辺三山評）最後に、出席者全員の岩倉評は、公家には珍しい『胆の人』そして、抜群の『リーダーシップ』。

（文責）小野　博正

関西支部報告

担当幹事　難波 康熙

namba@jttk.zaq.ne.jp

■第五十六回

十月二十二日開催、出席者八名。

輪読は第二巻の第二十六巻（章）里味陂府（リヴァプール）ノ記・上の百十六頁から始めた。

リヴァプールは、産業革命によって隆盛を極めたマンチェスター綿織物製品の輸出の中心港として飛躍し十九世紀にはアメリカとの貿易や船舶海上交通の中心として発展して、当時の「帝国第二の都市」となった。

後半は、ＮＨＫ「さかのぼり日本史」シリーズの、『明治「官僚国家への道・第四回」―岩倉使節団・近代化の出発点』のビデオを観る。その内容は大久保利通の西欧体験をベースとした国家体制の構築、具体的には内務省と官僚を中心にした近代化政策の推進を描いたものであった。大久保は明治維新はもとより明治六年政変以後の日本の近代化の中心人物であったので、今回は大久保利通という人物像と維新に焦点をあてて話し合った。今後も研究対象の課題としたい。

（文責）難波　康熙

特定非営利活動法人

「米欧亜回覧の会」ご案内

趣　旨　この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。
この歴史的な大いなる旅と「実記」は、まさに「温故知新」の宝庫といえましょう。
この素材を媒体に歴史を学び、現代の直面する諸問題についても自由に語り合う会です。

会　員　趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。

例　会　年に4回、全体例会があります。

部　会　テーマ別に読む会、歴史、現未来部会等があり、映像サロン・旅行会・研究会・シンポジウムなどを行っています。

機関紙　年に4回、機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。

役　員　理事長（泉三郎）他理事および監事で構成、会員の中から幹事十数名を選び、運営を担当します。

会　費　年会費6,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・部会・講演会などについては、その都度の会費とします。なお、遠隔地居住者、学生、仮入会希望者には地方会員、準会員、学生会員の制度もあります。

事務局　「米欧亜回覧の会」
〒135-0021
東京都江東区白河 4-9-14-1407
E-mail:info@iwakura-mission.gr.jp
TEL:080-6612-1101　FAX:03-3641-9407

入会申込

入会申込書は事務局にあります。新規入会に際しては入会金5,000円を頂きます。
なお年会費などのお支払は下記の口座への郵便振込が便利です。
00180-2-580729　特定非営利活動法人米欧亜回覧の会

ホームページ

メッセージ・活動と内容・岩倉使節団・米欧回覧実記・会員のページ　等
また、書籍・ＤＶＤ案内もあります
http//www.iwakura-mission.jp
＊お知らせ欄も時々チェックしてください

＜催し案内＞

2011年12月～2012年3月の予定です

☆新年懇親例会

日　時：1月19日（木）　18:30～20:30
（開場18：00）
テーマ：インド（2012年のテーマ国）
場　所：ラージマハール銀座本店
中央区銀座8－8－5　太陽ビル４階
03-5568-8080　（銀座通り、資生堂パーラーの並び、１階にBALLY銀座店）
会　費：8,000円（会員、ＯＢ・ＯＧ）
6,000円（家族、同伴者）4,000円（学生）

☆実記を読む会

日　時：12月 8日（木）　14:30～17:00
1月12日（木）　14:30～17:00
芳野健二氏　第21巻イギリス総説、第22巻ロンドン市総説
2月 9日（木）　14:30～17:00
3月 8日（木）　14:30～17:00
場　所：国際文化会館Cルーム（3月はEルーム）
会　費：1,000円

☆英訳実記を読む会

日　時：12月15日（木）　14:00～（忘年会）
1月19日（木）　18:30～21:00
Ch.77 A Record of the City of Naples
（当番：森本さん）
2月16日（木）　18:30～21:00
場　所：国際文化会館 402室
会　費：1,000円

☆歴史部会

日　時：2月20日（月）　18:00～21:00
「大隈重信」（小野博正氏）
場　所：国際文化会館
会　費：1,000円

☆関西支部例会

日　時：12月10日（土）　13:00～16:30
2月15日（水）　13:00～16:30
場　所：大阪弥生会館　(06-6373-1841)
会　費：1,500円＋昼食懇談会1,000円（12:30～）

編集後記

◇会員によるパネル・ディスカッションの要約および終了後の新入会員歓迎懇親会に参加された政井氏の寄稿で紙面が埋まり、全員参加型の十一月全体例会の盛会ぶりを反映した紙面となりました。また、会の事務を担当している小松さんが大学から派遣されて今秋から暫くの間アメリカに滞在することになり、ボストン、プロビデンスから滞在記が届きました。奇しくも実記を読む会の報告もボストンとなり、百四十年の時間の長さと身近さを考えさせられる当会ならではの「第二特集」のテーマとなりました。

◇前号で掲載するはずだった六月の歴史部会報告（「大久保利通」大平忠氏）が当方のミスで抜けてしまいましたが、より詳しい小論がホームページのアーカイブ（特別寄稿）に掲載することで大平氏にお許しを頂きました。現在、アーカイブ未掲載の小論が手元にいくつかありますが、分類の検討や掲載作業が追いついていけない状況です。掲載まで、少し時間がかかることがありますがご活用ください。また、小論の更新もありますので、会員のページ「特別寄稿」を時々ご覧ください。（N）